

典型性と非典型性に関する推意

四津雅英
東京海洋大学

会話の推意(*conversational implicature*)に関するグライス以降の研究において、特に関心を持たれてきた事例の中に、表現されている事物の典型性(いわゆるステレオタイプ性)、あるいは非典型性(非ステレオタイプ性)が伝達されるような事例がある。

たとえば「花子は昨日パイロットに会った」と言うとしばしば、花子が会ったのは男だという推意が生じる。また「花子は駅まで歩いた」と言うとしばしば、花子は駅まで普通の歩き方で歩いたという推意が生じる。このように、ある事物について典型的な表現(比較的短い表現や単純な表現であることが多い)を用いた発話ではしばしば、表現されている事物が典型的なものだという推意が生じるが、以下ではこうした事例のことを「*typicality effect*」(TE)の事例と呼ぶ。

これに対し、「花子は駅まで左足と右足を交互に動かして移動した」などと言うことで、花子は駅まで普通ではない仕方歩いたといった推意を生じさせることができる。このように、ある事物について非典型的な表現(比較的長い表現や複雑な表現であることが多い)を用いた発話ではしばしば、表現されている事物が非典型的なものだという推意が生じるが、以下ではこうした事例のことを「*nontypicality effect*」(NTE)の事例と呼ぶ。

この TE と NTE についての主要な説明としては、ホーン(*A Natural History of Negation* (1989)など)のものとレヴィンソン(*Presumptive Meanings* (2000))のものが挙げられる。二人はそれぞれ、グライスの協調の原理と会話の格率に基づく推意の分析を踏まえ、それを修正・発展させた推意一般に関する分析を行っており、それに基づいて TE と NTE について説明を行っている。

ホーンは、グライスの会話の格率のうち、発話内容の真実性に関する質の格率以外の格率は、会話への十分な貢献を求める Q 原理と、必要以上の貢献を禁じる R 原理の二つにまとめられると考える。こうした推意一般に関する分析に基づいて彼は、外延が同じ二つの表現のうち、より典型的な表現は R 原理に基づく推意によって、典型的でステレオタイプの内容を伝達する傾向にあると見なす。よって、TE は R 推意の一種ということになる。するとより非典型的な表現は、より典型的な表現にしばしばこうした付加的内容が伴うことを踏まえると、より情報量の少ない表現ということになる。そのため、いわゆる尺度推意(*scalar implicature*)——同種の表現の中でより情報量の少ない表現を用いることによる推意の事例と同じようにして、より非典型的な表現は Q 原理に基づく推意として、非典型的な内容を伝達する傾向にあると見なされる。よって、NTE は Q 推意の一種ということになる。

レヴィンソンの推意一般の分析は、主に一般的な会話の推意(*generalized conversational implicature*)に関するものだが、彼は推意を導く原理として、グライ

スの会話の格率のうち質の格率と、発話内容の関連性を求める関係の格率は残した上で、他に十分な量の情報の提供を求める Q 原理、必要以上の言語的情報の提供を禁じる I 原理、非典型的な表現を用いて非典型的・非ステレオタイプの状況を示すことを求める M 原理の三つがあるとする。彼は、自分の I 原理はホーンの R 原理に対応するものだが、ホーンの Q 原理が情報量のより少ない表現による推意と非典型的な表現による推意の両方を説明するのに対し、彼の Q 原理は前者のみを、M 原理は後者のみを説明するとする。彼によれば TE は I 原理に基づく推意、NTE は M 原理に基づく推意ということになる。

二人の説明には、注目すべき共通点がいくつかあると考えられる。第一に、TE や NTE はステレオタイプと密接に関連していると思われている。第二に、NTE は“メタ言語的”かつ“否定的”なものと思われている。NTE の事例ではある事物を表す非典型的な表現が用いられるが、その事物を表す典型的な表現が念頭に置かれており、話し手がその表現を用いることができないことを示すものとされる。他方 TE に関してはそのようなことはなく、“非メタ言語的”かつ“肯定的”と思われている。第三に、NTE はメタ言語的に否定できるが、TE は原則としてメタ言語的に否定できないとされる。一見、NTE は対応する TE に対するメタ言語的否定とよく似ており、否定表現を用いる代わりに非典型的な代替表現を用いた、一種のメタ言語的否定に他ならないように思われるかもしれないが、二人によればそれは正しくなく、NTE はあくまでメタ言語的否定が不可能なものに対して、メタ言語的否定と類似の効果を生じさせているものということになる。

二人の説明の主な問題点は、TE が大きく二つに分けられることを見ることで明らかになると思われる。TE には対応する NTE が存在するもの(「花子は駅まで歩いた」の事例など)と、しないもの(「花子は昨日パイロットに会った」の事例など)があると思われる。二人の見解は、それだけでは対応する NTE が存在しない TE の事例を説明できず、さらなる説明が必要となると考えられる。また、二人は TE が原則としてメタ言語的に否定できないとしているが、これは対応する NTE が存在しない TE については正しいかもしれないが、存在する TE に関しては正しくないように思われる。

本講演では、対応する NTE が存在しない TE を内容依存型、存在する TE を表現依存型と見なし、また NTE とメタ言語的否定には、二人の想定以上の結びつきがある——NTE はまさに、否定表現の代わりに非典型的な表現を用いた、一種のメタ言語的否定と見なせるという仮説に基づいて、新たな分析を試みる。この仮説によれば、内容依存型の TE は発話された文や表現ではなくて表現された内容に基づいているため、メタ言語的に否定したり対応する NTE を生じさせることは困難だが、表現依存型の TE は発話された文や表現そのものに依拠しているため、メタ言語的に否定したり対応する NTE を生じさせることができる。表現依存型の TE は、用いられている典型的表現の適用のふさわしさの基準に依拠しており、メタ言語的否定や対応する NTE は、その基準からの逸脱を示すと考えられる。ただし、典型的表現に適用のふさわしさの基準があっても、それに基づく TE が生じにくい場合もあるように思われるが、その場合でもしばしばメタ言語的否定や非典型的表現の使用によって、その基準からの逸脱を示すことができると考えられる。